

## 再考：木とのつきあい方

研究管理官 藤原 勝敏

20世紀は高度な機械文明に支えられた大量生産、大量消費の時代であった。高度工業化社会を実現したことで、受けた恩恵は大きかったが、地球規模での環境破壊という背負った負債も大きかった。持続的循環型社会を構築していくためには、この負債とどうつきあうかが極めて重要な課題である。

ここに一つの智恵がある。赤池学・金谷年展著『世界でいちばん住みたい家』（TBSブリタニカ：1998）で北海道の住宅メーカー「木の城たいせつ」の5Rプログラムが紹介されている。5Rとは、Reduce（減らす）、Reuse（再利用）、Recycle（リサイクル）、Retrieve Energy（エネルギー有効活用）、Restore（生態系復元）である。このプログラムは、木の加工と利用を通じてエネルギーの効率的な循環利用の実現を目指すもので、国内外で大きな関心を集め、環境省や国土交通省をはじめカナダ、アメリカでも高く評価されている。

ところで、Reuseに関しては、興味ある話がある。小原二郎著『木の文化をさぐる』（NHKブックス：2003）に伊勢神宮庁の営繕課長・小川弘氏の次のような話が載っている。「遷宮の工事には、12000本ものヒノキを使うが、古材の利用も考えられている。例えば、棟持柱は、新宮に使った次には宇治橋の鳥居に20年間使い、その次に桑名と関の参宮道の鳥居に使われる。他の材についても同じような再利用、再々利用の計画が立てられているので、無駄にならない」。ここには、“温故知新の智恵”がある。

「木の城たいせつ」のオーナー・山口昭氏の企業コンセプトは“もったいない”である。これは5Rに通じる要諦であり、加工においては無駄にならないモノを心をこめて作るモノ作りの哲学が、使用するときには知足の精神が、さらに廃棄においてはゼロ・エミッションの理念が求められている。自然の素材である木は本来生態系の循環のサイクルにうまく適合しているのであるが、たとえ木からのモノ作りといえども、作り過ぎ、使い過ぎ、そして廃棄し過ぎると、それだけ循環のサイクルからはみ出す危険度が増してくる。最も重要なことは、このサイクルからはみ出すゴミの山を築くために木を加工し、利用し、廃棄するような“愚”を避けることである。

いまこそ木とのつきあい方を見直す必要がある。われわれ研究者に求められているものは、上手に手を掛けて優しく加工する技術、長く大切に使う技術、最少限の廃棄に留めしかも無理なく自然に帰す技術の開発である。21世紀における木との上手なつきあい方の原点は、ここにある。

